苦労性の主人公とうさぎ～The Hole Under The Star-Ｔｒee～

高城紗貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
苦労性の主人公とうさぎ～Ｔｈｅ　Ｈｏｌｅ　Ｕｎｄｅｒ　Ｔｈｅ　Ｓｔａｒ－Ｔｒｅｅ～

【Ｎコード】
Ｎ２１１２Ｆ

【作者名】
高城紗貴

【あらすじ】
苦労性（主人公）とうさぎ（一応人間）とおまけで影が薄いへたれが支配された街を救う物語。戦闘ものからいつの間にかギャグに進化！？シリアスは一切なし！（たぶん）重要キーワードはたまご！（嘘）序章はまじめだけど、それ以降はいろいろと壊れてる話。サイト…ｈｔｔｐ：／／ｔａｍａｇｏｍａｎｉａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

序章：最初は比較的まじめだよ！！（前書き）

序章はえらくまじめですが、それ以降はいろいろとおかしいです。

サイトは下記のＵＲＬからいけます。

うさぎとそのた：ｈｔｔｐ：／／ｔａｍａｇｏｍａｎｉａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

序章：最初は比較的まじめだよ！！

序章

キン、と刃物がぶつかり合う音があたりに一帯響いた。
「チッ！」
本日何度目になるかわからない舌打ちをする。
それもそのはず、敵はなかなか倒れない。
もともと、強い敵ではあったが、こんなに強いのは想定外だった。
体は完璧に疲労していてやや重い。
しかし、それでも薙刀を持つ手に力を入れて、敵を思いっきり睨む。
こうなった、元凶を。

「いい加減諦めたらどうだ？絶好調状態のお前だったらともかく、疲れてんだろ？さっさと死んでくれよ。こっちはいろいろ忙しいんだ。」

「うるさいわね。それならあんたもさっさと尻尾まいてにげなさいよ。そうしたら万事解決。今まで通りにもどるわ。昔みたいな、平和な日常に…。」

「今まで通りね～」と敵が呟いたのが聞こえる。
とにかく、今の自分ができることは仲間の応援が来るまで時間を稼ぎ、目の前の敵を倒すこと
だ。悔しいが、あいつの言った通り体調が万全の状態ならともかく、疲れ切った体であいつと戦うのは自殺するようなものだ。唇を噛み、悔しさに耐える。

「ま、無駄なお喋りをして仲間が来られても厄介だ。そろそろ本気で行くぜ。」

言葉通り、今までふざけ半分だった目が、本気になった次の瞬間、敵は目の前から消え、背後から気配が生まれる。急いで、薙刀を自分の後ろへと振るが、空振りだった。
再び舌打ちし、神経を研ぎ澄ませる。
きっと見えないだけで、どこかにいるはずだ。

「そこか！」

薙刀を気配を感じた場所に大きく振る。
手ごたえはあった。が。

「やっぱり威力と勢いが弱いな。」

薙刀の刃の部分を敵が掴まれて、自分の攻撃が意味無きものへと変わる。
動かそうとするが、強い力に掴まれて動かせない。
刃の部分から、敵の血がぽたぽたとおちるものの、相手は全く気にしていなかった。
がくがくと、薙刀を持つ手が震える。

「さて、死んでもらおうか。」

敵が薙刀を掴んでない側の手から、炎がつくりだした。
「……。」
敵が、炎が、私に近付いてくる。
もう、だめだ。
私の胸に悔しさが広がった。

薙刀を離して逃げたところで、捕まるのがおちだ。
私は、死を覚悟し、目を閉じた。
「じゃぁな。」

――しかし、いつまで待っても痛みはこなかった。

「悪いが、そうはさせない。」

目を開けると、敵の首元には刃があてられていた。
敵は顔を顰め、急いで間合いをとった。
「仲間さん登場かよ。さっきのお喋りはやっぱりまずかったな。」
「後悔しても遅い。」
刀を持ち直して彼女は言った。私も薙刀を持ち直し、敵へと刃を向ける。
「形勢逆転か…。仕方がね、逃げるとしますか。」
「なっ、待て！」
彼女は適の元へ急いで走り出し、刀を大きく振った。
しかし、敵の姿はすでにもういなくなっていた。

序章：最初は比較的まじめだよ！！（後書き）

このあとから、一気にいろいろと変わります。
感想、批判、ツッコミ大歓迎です。

第一話：さぁ、おばちゃんたちの戦場へ！！

第一章〜第一話〜

とある、晴れた夏の日のこと。
空気は先日の雨の影響か、たっぷりと湿気を含んでいた。
おかげでじめじめしていて、なんだか嫌な気分になる。
こういうときはクーラーのきいた部屋にいたいものだが、今の私、神篠可奈には不可能だった。

「ちょっと、可奈！ぼさっとしてないで、さっさと歩きなさいよ！特売に遅れるでしょ！」

私に向かって叫んでいるのは友人の藤本うさぎ。
一見すると、黒髪に近い藍色のツインーテールとやや大きめな眼鏡が特徴的な知的クール美少
女だが、性格はいわゆるツンデレわがまま娘。
世の中は私のためにある、全人類よ、私のために跪きなさい！と、思っている節がある。
が、しかし、頭はめちゃくちゃ良い。
この前、学年で見事に一位をとり、あまつさえ、先生にテストの間違いを指摘した。
うん。同じ中二じゃないと何度思ったか。

「俺、本当に死にそうなんですけど……」

私のとなりでへばっているのは、弟の神篠翔太。
私と同じ栗色の髪は汗で額にくっついており、青い瞳は虚ろ気味になっている。

私よりかなり高い身長（推定１８０ｃｍ）を持ちながら、年が一個違いという不思議な生物だ。
「ねぇ、うさぎ、明後日のうさぎの遠足の弁当の材料だけで、何でこんな特売を求めて歩きまわらなきゃいけないの？もう2時間は歩きまわってるよ。」
翔太を見かねて、私は口を開いた。
実は彼、大量の野菜やら肉やらを持たされているのだ。
明後日の遠足に参加しないのにも関わらず、だ。
「だってさ、私が集めた情報とチラシをまとめた結果、この買い方が一番安く、材料を買えるのよ。これで最後だし、我慢しなさい。一応、男でしょう？」
たとえ、こんな偉そうに言われても、渋々とつきあうのは、私がおひとよしだからだと思う。
「次って何買うの？」
「うん、卵三パック。」
多いな。
「卵ってそんなに必要？ていうか卵いらなくない？」
「な、何言ってんの！卵焼きがない弁当なんて、弁当じゃないわ！！」
「じゃ、私の分の卵焼きをあげるから…。」
たしか、家に卵が少し残っていたはずだ。
「やだ。可奈の分が私のものだというのは当然のことだけど、私の弁当に卵焼きが入ってないのはいや。」
「私の分はもう既にあんた分ですか…」
となりを見ると、翔太は口から出しちゃいけない白いもの（おそらく、エクトプラズマ）を出している。本格的にやばい。
「わかった。じゃ、私が買いに行ってくるからいつものマクド（関東ではマックにあたるも

の）で待ってて。」
「い、いいんですか、姉貴！」
今まで、死にそうだった翔太が一気に復活した。
よし、白い物体はなくなってるな。
「一パック八十七円のやつを買ってくるのよ。」
うさぎの言葉に苦笑しながらも、私はおばさん達の戦場に歩き出した。

第一話：さぁ、おばちゃんたちの戦場へ！！（後書き）

ツッコミ、感想、批判大歓迎です。

第二話：眠いのよ…

第一章〜第二話〜

「はい、買ってきたよ。」

時間的には一時ちょっと。店内はピークのわりには、人が少ない。
そんな店内の隅っこ、植木鉢の陰にあたり、また、入口から距離がある座席に二人は座っていた。
「買えた？」
うさぎがこっちに大きく手を振って聞いてきた。
私もスーパーの袋を持ってないほうの手で、こたえる。
「三パック何とか買えたよ。おばさん達が怖かった…。」
席について、たまごが入ったスーパーの袋をおく。
「今日は土曜日だしね？ま、頑張ってくれたし、こっちに置いてあるやつ、好きに食べていいよ。」
そう言いながら、うさぎは山盛りになったバーガーの一つをとり、食べ始める。
「多いな…。」
「うん、そう？バーガー二十個とデザート六個と飲み物三個だけよ。少なくない？」
「いや、十分多いよ。」
「姉貴の好きなやつも数個買ったんで、どんどん食っちゃってください。」
翔太も山から一つとって食べ始める。
私も一つとろうとして手を伸ばしたが、止めた。
「…ね、うさぎ、なんで卵関係のバーガーがこんなに多いの？」
卵サンドバーガーや目玉焼きバーガー。
本当に卵ばっかりで、軽くひく。

「何言ってんの、ちゃんとそこに卵いがいのやつがあるじゃない。」
うさぎは山の中にある一個のバーガーを指した。
確かに、卵関係ではないが、うさぎが指したのはマズイと評判のイカスミバーガーだった。
嫌がらせだろうか…？
「普通のやつは埋ってるんですよ。先輩が卵のやつばっか食べるから、取りやすいように卵のやつを外側に置くことにしたんです。すみません。」
納得した私は、山の中に手を入れてとりだした。
そして、出てきたのは愛のごぼうバーガー。
たしか、この前発売された新作のバーガーだっけ…。
「…ね、もうちょっとまともなものを買ってこれなかったの？てか、買ったの誰？」
「ふぁたふぃ。」
こいつか。適当に買いすぎだろ。
「すみません、俺も少し買ったんですけど、四分の三は先輩が買いました。」
「…ま、しょうがないか。」
私は諦めて愛のごぼうバーガーを口につけた。
「あ、そういえば、さっき、全身黒タイツの不審者がいたらしいよ。今、警察が連行中ー。」
うさぎが思い出したように言い始めた。
「思ったんだけどさ、うさぎのその情報ってどこから仕入れてくるわけ？
特売といい、全身黒タイツの不審者といい…。」
「えー、可奈ってばそんな恥ずくぁすぃことを聞いてくるわけー。
やだ、マジありえない。」
「身をくねるな、気持ち悪い。」
うさぎはつまらなそうに「チッ！」と舌打ちをする。
「あ、でも、それは俺も見ましたよ。バーガー買ってるときに、店

の前で警察に連行されてました。」
「へ、へーそうなんだ。」
私は口元を引き攣るのを感じながらも、何とか返事をすることができた。
最近の人の考えはよくわからない。
「あんたも最近の人でしょうが。」
「え、ちょ、うさぎ、今私の心読んだよね！」

「私に不可能はないわ。」

リアルすぎて怖い。
うさぎはカップにささったストローをくわえ、飲み物を飲み始める。
その目は別方向を向いていて、何を考えているかよくわからない。
私は、たぶん翔太が買ってきたと思われるデザートを食べることにした。
「それにしても眠いわ。」
うさぎが突然言った。目も眠そうに半分と閉じている。
デザートを一口食べ、私は答えた。
「あっちこっちに行ったんだし、疲れてるんだよ。
眠いなら寝れば？ほら、翔太も寝るんだったら…、って、もう寝てるし。」
私は隣で寝てる弟を見て呟いた。心なしか幸せそうだ。
「あれ…、なんか、やばい。私も眠いかも…。」
私もなぜか、急に眠気に襲われた。
おかしい、さっきまで意識がはっきりしてたのに。
「ふぁ、もう寝よ…。」
私の意識はフェイドアウトした。

第二話：眠いのよ…（後書き）

ツッコミ、感想、批判大歓迎です。

第三話：あ、やべ、見つかった！！

第一章～第三話～

「あ、やばい、私まで寝ちゃったよ…。」
体を起こすと、翔太とうさぎが寝ているのが目に入った。
周りは静かだし、比較的客が少ない二時半まで寝てしまったのだろうか？
「ほらうさぎ、翔太、早く起きて。ちょっと、いや、かなり寝すぎたかも。」
うさぎと翔太は、眠そうに目を擦った。
「今何時？」
「わかんないけど、静かだから、たぶんお客さんが少ない二時半ぐらいだと思う。」
「ふぇ～」と意味がわからない言葉を呟きながら、うさぎは体を起こした。
まだ眠いのか、体がぐらぐらとゆれている。
「うさぎ、残りのバーガーどうする？このまま家に持って帰る？」
私の問いに、うさぎは「ここで食べるー。」と答えて、バーガーをもさもさと食べ始めた。
翔太も起きて、一緒に食べる。
私も食べかけのデザートの存在を思い出して急いで食べた。

変化が起きたのは全部食べ終わってからだった。
とりあえず、買いたかったものは買えたし、私たちはいったん家に帰ることにしたときのことだ。

「あー、テステス、ここらへんは俺たちが占領した。もういないと思うが、一般人はおとなしく捕まれ。それと、業務連絡、やったぞ！ついに、ついに人間どもを…。」

放送が突然流れ始め、私たちは顔を合わせた。

「何これ？」

流石のうさぎも、私の問いには答えられず、考え込んでしまった。

眉間には皺がよっている。

「むー、放送の人の頭がおかしくなったか、宇宙人が攻めてきたか…。」

「いや、宇宙人とかあり得ないでしょ。」

「だけど、人間どもがどうのこうのって言ってたから。確実に人類の敵だよね。」

「だけど占領するって話は聞いてないしな～。」と、うさぎは続けて呟いた。

ツッコミ所が多すぎてついていけないです。

「あのー」

「うるさいわね。今考えてるんだから黙ってなさい。」

「え、でも先輩、外に人いないし、怪物みたいのが平気で歩いてるんですけど…。」

彼が指した方向をみると、確かに誰も人がいないどころか、子供たちに大人気☆日曜日にやる某戦闘ヒーローの敵キャラに出てくるような怪物が町を闊歩していた。

思わず自分のほっぺを引っ張ってみる。

「ひたひ…。」

「当たり前でしょ。夢じゃないんだから。」

うさぎが呆れたように言った。

「近くでコスプレ大会でも…。」

「へー、すごいリアルな怪物。現実逃避してないで戻ってきなさい、このだめ男。」

「ドッキリ番組…。」
「現実逃避その二。町全体で私たちのために？普通に考えてあり得ないでしょ。
…それに、店員が店をほったらかしにして出ていくと思う？」
店の中は私たち三人しかいない。
それどころか、食べかけのバーガーも普通に置いてある。
それも一席や二席ではなく、ほとんどの席に、だ。
「どうする？」
「…こっそり外に出るか。」
うさぎは椅子をひいて、立ち上がった。
「厨房の裏に裏口があるはずだし、そこからこっそりでようか。」
「りょーかい。」
私たちはスーパーのレジ袋を持ってこっそり厨房のほうに入って行った。
いろんな食材が入っている倉庫を通り抜け、ようやくドアに辿り着く。
鍵は掛かってなかったので、私はノブを回して開けた。

第三話：あ、やべ、見つかった！！（後書き）

ツッコミ、批判、感想よろしくお願いします。

第四話：ネギソードよ、ネギソード！！

第一章　～第四話～

「ふー、外の空気は最高だわ。」

こっそり行動するのを完璧に忘れているうさぎは、清々しい程に叫んでいた。
「うさぎ、こっそり行動するんじゃなかったの？
これじゃ変な怪物もどきに目つけられるよ。」
「もう遅い。」
私は声が聞こえる方向へと、恐る恐る視線を向けた。
や、やばい、なんか二メートル近くの怪物もどきが立ってるよー、
手に剣があるよー、銃刀法違反で捕まらないのかよー…。
「え、うそ、何でいるの？」
「そりゃこっちのセリフだ。全員捕まえたと思ったのにまだ生き残りがいるとはな。」
怪物もどきも人間の言葉を喋るんだな、などとのんきに考える場合じゃない。
どうにかしないと…。

「可奈。」

「え、なんか逃げる方法思いついたの？」
私は期待を込めてうさぎの方を向いた。が、

「薙刀練習してるんでしょ！今こそその実力が発揮される時よ！」

「されるか！薙刀ないし、実戦で戦ったことないし！」

私の母方の祖母が薙刀の師範をやっていたので、私もその影響で薙刀を小さい頃からやっている。しかし、今の平和な日本で薙刀を使い戦うことなどあるはずもない。

「ネギよ！この前、ネギを武器がわりに戦ったアニメがあったわ！さぁこのネギを受け取りなさい！」

そういって、うさぎは私に思いっきり九条ネギを投げつけてきた。やや、変なところに飛んだものの、なんとかつかむことができた。

「…あのさ、無理だよね？」

「そんなことはないわ！可奈ならいける！ネギソードは最強よ！」

「わーい、ネギソードだ…、って、戦えるか！

だいたい何さ、ネギソードって！」

「古代ローマ時代から伝わる…。」

ああ、もうだめだ。

南アフリカ共和国に出張中お母さん、お父さん、私は怪物もどきにつかまりそうです。

「あの…、先輩…」

「何よ！人がわざわざ説明してあげてるときに！」

「敵が呆然としています。今のうちに逃げたほうが…。」

確かに怪物もどきは、うさぎのインパクトの強さに驚いてる。チャンスだ。

「よし、じゃ、急いで…」

「え、あ、おい、逃げても無駄だぞ。俺はこう見えても仲間の中では二、三番目に足が速いんだ。すぐ追いつくぞ。」

正気に戻ったようだ。まずい、本当にどうしよう。

やっぱりネギで戦うしかないの…？

「よし、翔太。」

うさぎが決意したように言った。
私は、自然と息をのんだ。

第四話：ネギソードよ、ネギソード！！（後書き）

ツッコミ、感想、批判大歓迎です。

第五話：レッツ、捨て駒☆

第一章　～第五話～

うさぎは、翔太を見た。
「あんた私とあんたの姉さんのためにここで捨て駒になりなさい。」
「……。」
沈黙が広がる。
「え、いやです！なんでそんことになるんですか！？」
正気に戻った翔太はそう言い返した。
「あんたは大好きなお姉ちゃんを助けたいと思わないの？それでもシスコ……いや、姉弟なの？」
「あ、姉貴のためなら…。わかりました。捨て駒になります。」
「ちょっと待て、人の弟を捨て駒扱いするな。いくら幼馴染でも怒るぞ。」
話が変な方向にぶっ飛んだので急いで止める。
昔からうさぎは人を誘導するのが得意だ。
「とりあえず、おれの存在を思い出してくれるとうれしいんだが…、いや、敵なんだから思い出せ。」
「あー、えっとすみません。」
なんとなく可哀そうになった。
とりあえずネギは構えておいて、怪物もどきの方へと向き直ることにする。
「ひとつ気になったことがあるんだが、どうやって隠れた？なぜ、あんなに探しても見つからないんだ？」
「いや、隠れてないですよ。単に寝ていただけですよ。」
「それは、おれたちの魔法がきいてるからな。」
「え、魔法使えるの！本当に！見せて見せて！」
うさぎが興奮した様に叫びだした。

その反動で、うさぎが持っていたスーパーの袋が翔太のお腹にのめりこんで、翔太が泣きそうになる。
あえて、見なかったことにしよう。
「魔法はどうでもいいんだ。おまえらはどうやって…」

「そこまでよ。その子たちから離れなさい！」

今度は何だと思って後ろを見ると、全身黒タイツの不審者がやってきた。
髪は長いし、胸もあるから、おそらく女だろう。
「チッ、邪魔ものがやってきやがった！」
「邪魔もので悪かったわね。」
女の人が何かを唱えると、薙刀が現れ、それを構えた。
「逃がさないわよ。」
「は～、めんどうくせ。」
その会話を切り口に二人は一気に間合いを詰めて、それぞれの武器を大きく振る。
鉄のぶつかり合う音が周囲に響き、二人ともいったん後ろに引いた。
が、引いたのは一瞬で、再び二人はすぐに間合いを詰める。

「Ｌｅｎｄ　ｐｏｗｅｒ　ｔｈｅ　ｆｌａｍｅ．　」

怪物は何かを唱え、その瞬間、女の人の背後には大量の炎が生まれる。
女の人はそれに気づいて後ろを向き、何かを唱え、今度は大量の水が生まれ炎を消した。
同時に大量の水蒸気が辺り一帯にうまれ、やがてそれは水の龍へと変貌する。
龍は怪物に突進し、対応の遅れた怪物は龍に体を巻きつかれることになった。

怪物は苦しそうにしながらなにかを叫ぶが、女の人はそのチャンスをいかすために薙刀を大きく振った。
「くそっ！」
怪物は、無理やり体を動かし、巻きついた龍を構成していた水はばらばらにする。
怪物はすぐに剣を横に動かし、女の人の攻撃を何とか防いだものの、少しよろめく。
「くっ、前より強くなってやがる。しかたない、逃げるとしますか！」
「なっ、また逃げるの！」
「俺は逃げる必要があれば逃げるよ。」
突風が辺りを舞い、勢いに押されて思わず目を閉じてしまう。
目を開けた時怪物はいなくなっていた。

第五話：レッツ、捨て駒☆（後書き）

遅くなってすみません。
一応、次で第一章は終了となります。
感想、批判、突っ込みお待ちしております。

第六話：短いんだぜ！！

第一章　～最終話～

「あなたたち大丈夫？」

女の人が優しげな笑みを浮かべてこちらにやってきた。
手にしていた薙刀も光の粒へと変わり、辺りに霧散した。
「はい、えっと今のは…」
「見ての通り怪物よ。って、言っても難しいよね…。」
女の人は困ったように頬を掻く。
案外いい人なのかもしれない。
全身黒タイツだけど。
「私の名前は山吹瑠璃。ここの地区の怪物を倒す仕事をやっているわ。よろしくね。」
そう言って、山吹さんはにっこりとほほ笑んだ。
青空のような髪と瞳がきれいな人だ。
全身黒タイツのためか体格もすらりとしているのがよくわかるし、身長も百六十五はあるだろう。
「神篠可奈です。こっちは弟の翔太に、眼鏡かけているのが藤本うさぎです。」
「よろしくお願いします。」
「よろしく。」
一通り自己紹介が終わると、うさぎは口を開いた。
「ちょっと聞きたいんだけどさ、ここら辺にいた人たってどうしたの？」
年下にもかかわらず、うさぎはうさぎだった。
「う～ん、細かい話は後にした方がいいかも。ちょっとここら辺は危ないから…」

辺りを気にしながら山吹さんは言った。
確かに、いつ怪物が襲ってくるかわからない。
「じゃ、ちょっと一緒に来てもらえる？」
私たちは顔を見合わせて頷いた。

あとがき

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
第一章の一番最後なんですけど、最後故かかなり短くなりました。
おかげで、まさかの投稿不可能。
というわけで、あとがきをここで書かせていただきます。

この作品は、私が中学生のころから連載していたものを加筆、修正したものです。
ギャグをたくさん詰め込めようとするあまり、戦闘が予定よりかなり少なくなりました。
加筆、修正にあたり、戦闘部分を増やしていきたいと思います。
それでは、次の章でまた会えることを…。

第七話：うさぎの精神攻撃

第二章～第一話～

「姉貴、変な人じゃね？」
「いや、まー、そうなんだけどさ…」
「でも、あの人についていくしかないわよ。
怪物みたいのにつかまったら今度こそやばいし。」
うさぎだったら、なんとかできそうなきがするのは私だけだろうか。
あのあと、私たちは一通り自己紹介をして、怪物から避難するために移動することになった。

「ま、不審人物であることは認めるけど。」

先頭を歩く不審人物こと山吹瑠璃さんはよろめいた。
「あ、大丈夫ですか？」
「え、えー、大丈夫よ。あと少しで避難場所に着くからもうちょっと頑張るのよ、私」
こぶしを握って、山吹さんは呟いた。
心なしか、泣きそうだ。
「ていうかさー、さっき、警察に連行されてたよね。」
「え、あー、じゃ、さっきうさぎが言ってた、警察に連行されてた人って、山吹さん？」
「あはは、そんなこともあったわね～。」
若干歩くスピードが速くなる。
「黒タイツなんか着るから…」
「私だって、私だって好きで着てるわけじゃないのよ！

これには止むえない事情があって…。」
「へー、どんな事情？」
山吹さんは少し悩むと口を開いた。
「さっきの怪物は実はこの世界のものではないの。この世界とは別の世界…、ゲーム風にいえば異界にあたるところ、そこからあいつらはやってきた。」
足を止めて、私たちのほうへ振り向いてた山吹さんは、そう告げた。
「異世界、そんなもんが世の中にあるはずが…」
「いや、あるわ。」
眉間にしわを寄せて、口元に手をあてながらうさぎははっきりと断言した。
「私が随分前に仕入れた情報だけど、この世界とは別に怪物が棲む世界があるって。
ガセかと思ったんだけど…。」
「…なんでそんな重要機密を…」
「うん、あ、ちょっとね。」
うさぎの眼鏡が光ったような気がした。
「たしか、その怪物を倒す人のことを、狩人（ハンター）っていうんだっけ。」
「え、えぇ、そうよ。」
「狩人は基本的には隠密に行動する、って聞いたんだけどあなたは明らかにでしゃばってるわよね。」
「う…」
「それに全身黒タイツだし、これじゃ目立つなんてレベルじゃないわよ。」
「そうなんだけど…」
山吹さんの声が泣き声になる。
「うさぎ、あんまりいじめちゃだめだよ…」
とりあえず、そろそろフォロー入れたほうがいいだろと思った私はうさぎに言った。
「それに、なにか事情があるんですよね？」

「えぇ！その通りよ！別に、全身黒タイツが好きな変なお姉さんというわけじゃないわ！」
山吹さんがこぶしを突き上げて、そう叫んだ。
「あー、あの、そんなに大声で叫んだら敵に見つかるような気がするんですけど…」
しまったというように、山吹さんは慌てて口を押さえた。
「う、え、えーっと…」
「あ、理由は何ですか？」
「そ、そう、理由！あの怪物を倒すには、コスチュームみたいのがあって、それがないと倒せないのよ！
で、コスチュームは人によって違うんだけど、私の場合はたまたま…」
「全身黒タイツがコスチュームどんなヒーロよ。」
うさぎが鋭い所をついた。
「いや、でも、日曜の七時ぐらいにやる戦隊者だって微妙にタイツだよ。」
「むー、確かにそうね。」
フォロー成功！
「とりあえず、さっさとその避難場所に行きましょう。」
「……。」
うさぎは言うだけ言うと、さっさと歩いて行った。

第七話：うさぎの精神攻撃（後書き）

第二章開始です。
間があいてしまってすみません…。
だけどテスト近いからさらに間があ（ｒｙ
頑張ります…。

ツッコミ、感想、批判お待ちしております。

第八話：主人公は実験台☆（前書き）

すみません、間違えました。
修正したので大丈夫です。
内容はがらりと変わっています。

第八話：主人公は実験台☆

第二章〜第二話〜

「これが、避難場所？」

しばらく歩くと、木に囲まれた野原に辿り着いた。
ところどころに野花や、色とりどりの蝶々がひらひらと舞っていた。
「見事に何もないわね…。」
「た、たしかにそうですね…」うさぎと翔太が呆然と呟いた。
「地下にあるの…、あそこにおおきい木があるでしょう？
その真下に避難場所、私たち狩人は基地って呼んでいるわ。」
「「基地？」」
「そう、基地。」
ますます戦隊者に…。
山吹さんはしゃがんで木の下あたりをあさると、鉄の取っ手みたいなものを見つけた。
「これが、い、り、ぐ、ち、で…。」
山吹さんは取ってを思いっきり引っ張ると、木は「ギッ、ギギギッ」と不気味な音をたてて倒れた。
「あ、あー」
木の下からは大きな穴ができ、梯子まで付いている。
山吹さんを見ると、ものすごい笑顔だった。
下りろということだろうか…。
「翔太、まずあなたから降りなさい。」
「え、俺からですか？」
「もちろんよ！愛しのお姉さまが…」

「はいはい、それはもういいから。」
「大丈夫！別に危ないというわけではないから、さぁ、降りて。」
うさぎと翔太は睨みあい、山吹さんは相変わらず笑顔だった。
「もういいよ、私から下りるよ。」
私はため息をついて下りた。
「あ、可奈、ちょっと待って。」
梯子に手をかけようとしたとき、うさぎが止めた。
「たまごはおいていって。」
切れそうになったなにかを無理やりつないで、うさぎにたまごが入ったレジ袋を渡す。
翔太が心配そうな顔をするなか、私は「基地」の中に入っていった。

「かなー！中は大丈夫そう？」
私はあたりを見て、軽く手を振った。
なかはまるで、映画の中に出てくるような基地が広がっていた。
床や壁は、鉄に似た物質でコーティングされている。
「はー、意外と普通だわ。」
いつのまにかうさぎが下りて、私の隣で呟いた。
手にはしっかりと、たまごが入ったレジ袋が握られている。
「やっぱり、一番はタマゴなんだね…。」
「当たり前でしょう！世界の宝石って言うじゃない！」
言わないよ。
「姉貴、そんなのにいちいちつきあってたら埒が明きませんよ？
てっとりばやく無視するのにかぎ…」
「うさぎアッパァァ！！！」
「ぶほぉぉ！！」
翔太の体は重力に逆らって空中を舞い、天井にぶっつかるとそのまま落ちた。

「ふん。」
「……ま、いっか。」
あえてみなかったことにしよう。開き直ることにする。
「ちょっと、大丈夫？」
山吹さんがおりながら、心配そうに声をかける。
「いつものことなので、放置しても大丈夫です。」
となりにいるうさぎも頷いた。
「そ、そっか。ならいいんだけど…。
とりあえず、ちょっと話があるから、一緒に部屋に来てもらってもいい？」
山吹さんの言葉に頷こうとした瞬間、それはやってきた。

第八話：主人公は実験台☆（後書き）

テスト終わったぞぉぉ！！
というわけで、更新です。
さりげなくいつもより若干量が増えています。
感想、突っ込み、批判お願いします。

第十話：おじさんがこわいぃぃ！！！（前書き）

すみません、前回の話をまちがえたので辻褄があわなかったと思います。
修正しておきます。

第十話：おじさんがこわいぃぃ！！！

第二章～第三話～

「あ、やまぶきー、どうしたんっすか、こんなところで？」
私が適当に返事すると、山吹さんに手を降る女の人がいた。肩まであるだろう緑の髪を二つに分け、忍者っぽい服を…
「新たな変質者…」
「ち、ちがうわよ。一応狩人よ。」
山吹さんが慌てて訂正した。
だが、鎖分銅を持ちながらこっちに手を振る姿はけっこう不審者だ。
「山吹、この前のあれですけど…」
「あ、ごめん。用事あるから後でね。」
その瞬間、忍者服の女の人はショックを受けたように突然倒れた。
「山吹、ひどい！うちより若くてかわいい女の子がいいんですね！しょせん、私なんて、私なんて、いくらでもかえがきくボロ雑巾だったッスね…。」
「うわっ…。」
となりでうさぎが呻いた。
「ちょっと、ヨーコ！ほかの人が聞いたら勘違いするようなことを言わないでよ！
あ、こっちは佐々木ヨーコ。さっきも言ったけど一応狩人…、のはず。」
「…はず、ですか…。」
なんともいえない沈黙が広がった。
「そ、それはそうと、この子たちはどうしたんッスか？」
「町に残ってたから、連れて来たの。
あの避難場所までちょっと距離あるし、こっちの方が安全かなー、と思って。」

「なるほどー」と、ヨーコさんは呟いた。
「じゃ、広瀬のところに行くんッスか？」
「えぇ、私が見たところ、素質あるみたいだし…、最終的な確認を行うわ。ヨーコ、広瀬に伝言頼めない？」
「そうッスか…、三人とも頑張ってくださいッス！」
私たち三人の頭には、疑問が軽く浮かんだ。

…、そして、あれから数分後、私たちはいろいろとピンチに陥っています。まず、目の前にものすごく人層の悪いおじさんが足を組んで座っています。
となりにいるうさぎも顔を青くしてるぐらいです。
しかし、なによりもこの気まずい沈黙。
おかしいな、さっきまで変な人と喋ってたのに。
あのあと、私たちは豪華な部屋に連れてこられた。
そこで、しばらくは出されたお茶なんかをのんでいたのだが、厳ついおじさんが入ってきたことで空気が変わった。「あ、どうぞ、歓談していてください。」といって、山吹さんと喋り始めたが、明らかに歓談できる雰囲気ではない。というか、額の傷痕とかサングラスとか、裏の世界で生きてるかんじが出てる。
「お茶はおいしかったかい？」
厳ついおじさんが笑顔で口を開いた。
「は、はい！とってもおいしかったですっ！
程よい甘さで、色とかもきれいでした！」
「お、俺も、おいしかったです！
先輩が、ちょっとにがーい！とか、言ってましたけど、あまり、そういう風に感じられず、おいしかったです！」
言い終わった瞬間、翔太の足は、うさぎの足により思いっきり踏んづけられていたが、あえて無視した。

「あはは、少し苦いのか…」
厳ついおじさんが苦笑して言った。
「…実はこの紅茶、少し特殊なものでな、これを飲める人はそういないんだよ。ゲーム風にいえば、魔力見たいなものがないと吐きしてしまうんだ。」
「どういうことですか？」
「確認したかったんだよ。狩人の性質をね…」

第十話：おじさんがこわいぃぃ！！！（後書き）

これで、第二章は終了です。
感想、批判、突っ込みよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2112f/

苦労性の主人公とうさぎ〜The Hole Under The Star-Ｔｒee〜

2010年10月28日06時24分発行